



フィリピン共和国オルモック市の風物詩

Charming Sights in Ormoc City

賀来 衆治

KAKU Shuji

株式会社建設技研インターナショナル
/事業本部/技術第2部/課長



1991年11月5日にオルモック市を洪水が襲い、死者・行方不明者約8,000名、家屋被災13,370戸の未曾有の被害を受けた。「大洪水で消えた町」で紹介されている大洪水である。国際協力事業団(JICA)により1993年本格調査が行われ、1996年に日本政府の無償協力資金による援助が決まった。この間も小規模の洪水が発生し、河川付近に住む住民は常に洪水に怯えている状況であった。

1998年2月より施工監理としてレイテ島オルモック市に約3年7ヶ月赴任する機会を得た。ここにフィリピン国における地方都市の生活事情を紹介する。

1. フィリピン国レイテ島

フィリピン国は北部のルソン地域、中部のビサヤ地域、南部のミンダナオ地域と大別でき、レイテ島はビサヤ地域東部に位置している。

レイテ島は日本人戦死者が約10万人を超える第2次世界大戦の激戦地である。レイテ島の北東には州都のタクロバン市あり、大戦中に「I Shall Return」で有名なマッカーサー将軍がフィリピン国に再上陸を果たした場所である。その反対側、島の南西にオルモック市は位置する。

●1 オルモック市

オルモック市はレイテ島の南玄関としてルソン地方、ビ



■図1ーフィリピン共和国の全国図



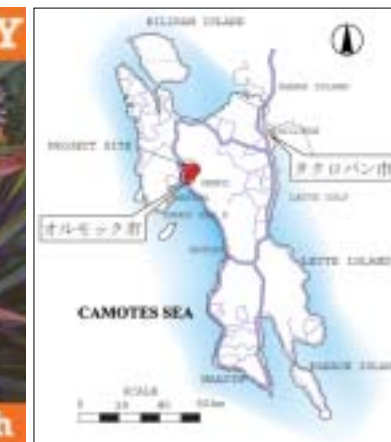
■写真1ーオルモック市の市街地全景、1998



■写真2ー現在のオルモック港とバスターミナル



■写真3ーオルモック市の標語



■図2ーオルモック市位置図

サヤ地方、ミンダナオ地方から来る船舶の係留基地である。港を出るとバスターミナルがあり午前5時より午後11時まで営業を行っている。夜間に大きな客船が出航するため、港の前は常に賑わっている。オルモック市の自慢は3つあり、第1にスーパードームである。これはフィリピン国で3つしかない冷房付きの体育館で約4,000名を収容できる。第2は全国規模で行われている「Clean and Green」(清掃と緑化)キャンペーンで、オルモック市はレイテ島の中では常に1番であり、1997年には全国で第1位に選ばれた。とにかく街中にごみがほとんど落ちていない。第3にトグナンの地熱発電所である。世界で第2位の規模を持ち、首都マニラ圏(予定)やセブ島へ電気を供給している。

オルモック市の主産業は農業であり、さとうきび、パイナップルのプランテーションと米を生産している。米は3

期作を行っている。

2. プロジェクトに参加して

●1 洪水対策工事

洪水対策は2期に分かれて行われた。第1期では、洪水被害を拡大した山岳部からの流木を止めるスリットダム3基、河道拡幅に伴う橋梁4橋が建設された。また、第2期ではオルモック市内を流れる2河川の河道改修(総延長約8km)に加えて、内水排水のための樋門、樋管が建設された。

工事は1998年2月に開始し、2001年8月に完成した。施工式は2001年の4月にフィリピン国アロヨ大統領、在比日本大使館を迎えて行われた。

●2 住民参加による維持管理

本事業では、施工期間中、オルモック市長及びエンジ



■写真4、5ー工事中に掘出した砲弾と持主不明の軍刀



■写真6、7ーレイテ島には数多くの鎮魂碑がある



■写真8—河道改修後の河口から見えるカンギボット山



■写真9、10—パーティと語らいが好きな地元の人たち



■写真11—河道改修後のアニラオ川



■写真12—事完成後の洪水によりスリットダムに堆積した流木と玉石

ニアが中心となって、施設の維持管理組織の構築に合わせて、河川隣接のバラングイ(日本で

云う、自治会、町内会)、NGOを招いたセミナーと親水イベントが行われた。その成果として、現在、各バラングイが市と連携を取りながら不法占拠者、施設の破損、排水路の清掃等のモニタリング作業を行っている。フィリピン国において、初めての住民参加による河川維持管理を実践している本プロジェクトは各方面から注目されている。

3. オルモック市の風物詩

●1 名産品

オルモック市の名産品としてお薦めなのがパイナップルである。このパイナップルは総じて小ぶりであるが、とても甘味があり、中心部の芯も軟らかくて食べられる。因みに、この種は突然変異にて出来たものさうだ。当地を訪れた方々は皆、“おいしい、おいしい”と感激して

くれるが、困ったことに殆んどの方が“持って帰りたい”との衝動に駆られる。ところがパイナップルを手荷物にしないと飛行機に乗れないため、荷造りが必要である。しかし、パイナップルは嵩張り、棘があるため、移動する前はいつも大騒ぎになる。

海に面しているため、天候次第で新鮮な魚貝類が食べられる。ココナツミルクに魚の刺身を入れたキニラオは、そのココナツの味に慣れてくると食事の前菜に最適だ。

肉類は、レッチョン(豚の丸焼き)がおいしく、何かの記念日を見つけては、必ずこれを食べていた。また、豚肉を揚げたクリスピーバタも食べ始めるとなかなかやめられない。そのほかに、鶏、やぎ、蛙、当地で珍しいものでは、鰻や地豚(黒豚)がある。

オルモックのおいしい水ときれいな空気の下では、すべての食べ物がおいしく感じられた。

●2 慰霊団

オルモック市はセブ島にあった日本海軍の司令部よりCamotes Seaを挟んで対岸に位置し、レイテ島における日本軍の最前線基地であった。オルモック市に赴任する前、日本で大岡昇平の「レイテ戦記」を読んだ。着任してまず驚いたことは、市街地を一步離れると「レイテ戦記」での風景描写そのままの自然の姿が目飛び込んできたことであった。オルモック湾の対岸の三角山(カンギボット山)は、日本軍の最後の集結地であるため、いまでも遺骨、遺品、軍票が見つかる。また、山下財宝の発掘に執念を燃やす人もいる。

在任中の2000年は終戦55年目に当たり、とりわけ日本からの慰霊団が多く、10人から20人程度のグループで訪問されていた。参加者はみな年配の方が多く、戦争の傷あとが癒えてないと感じた。

また、NGO、NPOの方の活躍もあった。たとえば、福

岡県から来られたマジックショーと医療のボランティアは日本とレイテの友好に貢献していた。

●3 人間関係の作り方

フィリピンにおける最小の自治単位はバラングイである。バラングイキャプテンは、市より多少の給金を貰い、住民の意見や要望を市長や市議会に伝えたり、住居地の清掃および治安の維持、夫婦喧嘩の仲裁、仕事の世話等々地域の世話役である。

伝統的なフィリピン人社会では、恩の貸し借りを守ることが最も大切な道徳である。フィリピン人との付き合い方上知っておかなければならないものに、コンパドレの習慣がある。この習慣は田舎へ行くほど強いと思われる。

コンパドレ(Compadre)は、カトリックによる礼儀的親族を指す言葉であり、第一義には自分の子供の名付け親をいう。また、上位の者にとって、下位の者とコンパドレ関係を結ぶことは社会的名誉であり、さらにエリート階級としての義務であると教えられるのである。上位の者は、下位の者に金銭や仕事を提供することで信用と名誉を得、下位の者は忠誠を捧げることでこれに応える。

コンパドレは人間関係や仕事でトラブルの際に解決法としても用いられている。オルモック市のような狭い地域社会では、バラングイキャプテンや市の有力者がコンパドレであれば、生活が容易である。

4. 洪水、ふたたび

昨年の7月17日に、再び、1991年と同規模の洪水がオルモック市を襲った。今回は満潮時と洪水が重なったため、市街地には一時的に内水氾濫が起きたが、人的被害は無かった。同7月28日にオルモック市の市議会より日本政府に対して本プロジェクトに対して感謝状が出された。また、現地のエンジニアより、“継続して維持管理を行うことにより、再び来る洪水に対する被害を軽減できる事が理解できた”とメッセージがあった。実にうれしい限りである。

(参考文献)

- 1) 加藤薫、「大洪水で消えた町」、草思社
- 2) 大岡昇平、「レイテ戦記」、中央文庫
- 3) 高野正志、「フィリピン・バリュー」、野村総合研究所



■写真13—河川護岸のペインティングコンテストで優勝した作品



■写真14、15—川は住民生活の一部になっている



■写真16—バラングイ対抗の河川沿いクリスマス飾り付けコンテスト



■写真17、18—2003年7月17日に再びオルモック市を洪水が襲った



■表—オルモック市の概況

人口	156,669人 (2000 Projection)
人口密度	334 /sq.km
人口増加率	2.13%
識字率	94%
言語	英語、セブワノ、フィリピンノ、ワライ、中国語
面積	464.3 sq.km
土地利用	農地62%、森林16%、草原および空き地15%、市内地5%、マングローブおよび湿地2%
距離	セブより65海里、タクロバンより109km
交通の便	マニラよりバス26時間、船36時間、セブより航速艇2時間、タクロバンよりバス2時間、ダバオよりバス22時間
時差	日本より1時間遅い
気候	年間を通して常に雨が降る、月最大平均の降雨量は1月で327mm、年間の平均気温は夏期には34度、その他の時期は平均21度である。
主要農産物	さとうきび、米、ココナツ、果実(パイナップル)
主要産業	トグナン地熱発電所(発電容量752.5MW、最大1,000MW)